

解釈されえぬ沈黙

—*The Voyage Out*における文明と女性の意識の場所性—

伊藤裕子

ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) の最初の長編小説 *The Voyage Out* [VO] (1915) はウルフの小説の中でも登場人物の空間的移動の幅が特に大きい。しかし、若き女主人公は旅行空間において教養小説的な成長をとげるといよりは、自己の世界にこもり孤立した様相を保ち続ける。登場人物は物語の冒頭で船上に場所を移し、ロンドンを出発して、著者ウルフも訪れたことのない異国、南アメリカへと向かう。この旅の表現は、見知らぬ異国へのエキゾチックな旅行や観光を前面に出したものではない。本国から南アメリカというダイナミックな物理的な場所の移動とはほとんど対照的に、登場人物たちが作り出す船上の世界、あるいは南アメリカのサンタ・マリーナのホテルにおいて繰り広げられる社交空間は、祖国のある特定の社会的階層が作り出す社交界の縮図にある。あるいは、彼らが作り出す空間は、船上および現地での狭い人間関係の中で、より凝縮された上層中流階級社会となるといった印象を与える。現地におけるピクニックのシーンを除いては、主たる登場人物は上層中流の舞台設定の中に据え置かれるため、旅という経験から予期される新しい世界の要素は、物語のそこかしこに見られるわけではない。主人公、レイチェル・ヴィンレイスは、原因不明の熱病により病床に臥すことを余儀なくされ、物語は、横たわる彼女の意識の世界の描写を伴いながら、彼女の命自体を終焉に向かわせるという、虚しい結末となっている。こうした背景のもと、レイチェルが新天地において何らかの新しい見地を得るのではないかといった読者の期待は裏切られる。

この小説では、主人公にとって未知の場所への船旅と滞在が、自己を閉ざす方向へと彼女を向かわせる。婚約し、未来が開けたかに思われる主人公を、語

り手はなぜ意識不明にし、死に至らせるのか。主人公の沈黙と死については、様々な文脈から解釈を試みようという読者の側の探求心も高まる。主人公レイチェルの死は何を意味するのか。衰え行くレイチェルの意識の表現は、妄想的想像（ナイフを持った老女など）の表現を含み、病床において熱に侵された精神状況を描き出しているのだが、レイチェルの妄想的な心理の表現は、実は物語のそこかしこに見られる。エイベル（Elizabeth Abel）らは、レイチェルが経験するテレンス・ヒューエットとの恋愛自体が、結婚という社会的義務、そしてテレンスへの服従を意味すると定義し、外的世界から閉ざされた病床における幻覚は、彼女を閉じ込めることになる結婚生活や社交界からの逃避でありかつ彼女の精神に負担を与える肉体性からの逸脱でもあるととらえ、そうした妄想的な意識の言語化を評価している。その肉体性とは彼女の音楽という芸術への欲求を挫く原因であるとも述べている（*The Voyage In 4*）。ピアノ演奏はレイチェルの特技であり、言語による自己表現よりも物語中において彼女の存在感を顕著に示すものである。

精神状況の表象といえ、同時代の20世紀初頭のフロイト（Sigmund Freud）の著作、特に精神にまつわる考察を思い浮かべる。フロイトとウルフ双方とも意識を取扱っているという点、ジェイムズ・ストレイチャー（James Strachey）がフロイトを英訳し、ウルフ夫妻が運営するホガース・プレスから出版されている点においても両者は結び付けられがちである。エイベルによる、*Virginia Woolf and the Fiction of Psychoanalysis*は、VOの分析は含まないものの、ウルフのフィクションが、精神分析学を脱権威化し、精神分析の語りのフィクション性を暴くのだと論じている。遠藤不比人は、ウルフとフロイトを関連付けようとする事自体「凡庸な文学的連想」であり、また制度的発想であると批判し（34）、文学と理論（心理学的理論）を二項対立的に秩序化することの誤謬を証明する。そして、それまで抑圧され表立って論じられなかった狂気を一定の真理とし、狂気との対話を排除しなかったという点で、フロイトを評価する現代思想に言及している（遠藤43）。ウルフはといえば、VOにおいて制度を逸脱した女性の思考様式や、病床のみならず日常における妄想的意識と向き合い、それを抱くレイチェルの心理的状况を差別化することなく表現している。

本論では、敢えて、V/Oとフロイトの著作における精神の表象の比較を試みてみたい。そして両者が人物の意識に焦点を当てながらも、精神の内面性に対してそれぞれどのように異なる意味付けを与えているのかを、セクシュアリティ、すなわち性や欲望にまつわる表象に関連付けられた場所性に着目して考察したい。特に非ヨーロッパ世界とセクシュアリティの表象との関係がいかに描かれているのかを、V/Oとフロイトの著作の中から見いだし、レイチェルの内的世界におけるセクシュアリティへの反応に対して、フロイトにおけるセクシュアリティとは異なる意味付けがなされていることを明らかにしたい。この論では文学とフロイトのテキストとを並置し、20世紀初頭のほぼ同時期に書かれたV/Oおよびフロイトの著作が暗示する内的空間の表象から、セクシュアリティと無意識にまつわる表象の位置づけを比較考察する。

V/Oにおける女性のセクシュアリティについて、ロビンズ (Dorothy Dodge Robbins) はフロイトによるドーラという女性の精神分析と比較し、ヒステリーの症例とされるドーラの分析が男性の立場を有利に位置づけるものであり (131)、ヘテロ・セクシャルな男性の女性への欲望を女性の欲望に投影しているという点においてフロイトは誤りを犯していると述べる (136)。ウルフはフロイトとは対照的に、レイチェルを男性中心的なセクシュアリティの解釈を拒否する女性として描いていると述べ、女性の心理の解釈に関して、それまでのセクシュアリティに対する学説や理論にとらわれない指針を提供している (144) と評価していることは意義深い。この小説では、レイチェルを男性優位の解釈から解き放ち、定義を与えないまま、解釈されえぬものとして、彼女の内的葛藤が描かれると考えられる。

南アメリカへの航海による移動は、都市の退廃が進んだロンドンから純粋な中流社会への移行を示す。レイチェルの叔父、叔母アンブローズ夫妻がロンドンのウエスト・エンドから中心に向かう途中の場面では、貧困層の増加を嘆いている (12-13)。この小説において、ロンドンから、南アメリカへ行くことは、中流階級にとっては、ロンドンではもはやかなわない、彼らが自らの文化を純粋に保持することのできる世界への旅であるともいえる。ルイス (Roy Lewis) は、社会的階級を、お互いに共通の特性を持ち合わせていることを意

識する人々の集団であると定義し、社会的流動性によって階級移動はあっても、家族が人物の階級を定める決定的要因であると述べる(14-15)。そこでレイチェルの旅は両義的な意味を持つてくる。すなわち未知の世界への旅でありながら、もといたロンドンの上層中流階級社会と同じ空間、あるいはそれがより凝縮された社会への回帰となるのだ。この両義性がさらにレイチェルの精神的発達の両義性をも物語るように思われる。すなわち、未知の世界を経験することによる成長物語といったものを読者に期待させながら、より閉ざされた旅先の中流階級社会への引きこもりと死の結末を伴う物語となっているのだ。レイチェルは、同行する叔母のヘレン・アンブローズが評するとおり、周囲が期待する人間関係を築く人物ではない。レイチェルはロンドンの上層中流階級社会に育ち、それまで外部の世界から隔絶されてきた。ヘレンが、24歳のレイチェルを6歳に見えるというとおりに、彼女は経験に欠け、外部世界から保護されている¹。この旅はレイチェルにとって、大人へと成長する契機となるべきイベントが数々もたらされる未知の世界への移行であるにもかかわらず、彼女自身が再び同じ社会的関係性に囲まれ、精神的にも閉ざされた世界に閉じこもることになる。エステイ (Jed Esty) は、大洋や未開の南アメリカの風景が際限なく広がる光景が、レイチェルの発する言説と重なり合うことにより、成長どころか、自己が解体してゆくのだと述べ、こうした植民地にまつわる空間がこの物語の教養小説としての性質を成り立たなくさせているのだと論じる (134-35)²。

物語は、船上と新世界でのレイチェルの滞在を異様なイメージの経験と結び付ける。新しい環境の中で出会う、リチャード・ダロウェイは、レイチェルをそうした恐ろしいイメージへと導く役である。リチャードとのキスは、レイチェルにとっての最初のセクシュアリティの経験として描かれるかに思われるが、彼女の見る夢が語るように、野蛮な印象と結び付けられている。

She dreamt that she was walking down a long tunnel, which grew so narrow by degrees that she could touch the damp bricks on either side. At length the tunnel opened and became a vault; she found herself trapped in it, bricks meeting her wherever she turned, alone with a little deformed man who squatted on the floor

gibbering, with long nails. His face was pitted and like the face of an animal. The wall behind him oozed with damp, which collected into drops and slid down. (77)

彼女の夢として表現される、恐怖を掻き立てるイメージは、セクシュアリティが彼女にとって何か得体の知れないものであり、恐怖の対象であることを示すといえる。レイチェルがアンブローズ夫妻の親密なキスを目撃するシーンの直後においても、海の底を眺めるレイチェルの視点から、語り手は、そこには見えぬ、“the black ribs of wrecked ships, or the spiral towers made by the burrowings of great eels, or the smooth green-sided monsters who came by flickering this way and that” (27-28) に言及する。このように、彼女にとって何らかのセクシュアリティの経験は、得体のしれない恐ろしさや獣性を伴う。物語中では、こうした夢や無意識的に飛び込んでくる心的イメージに対しては、明確な意味付けがなされていない。しかし、南アメリカという未知の世界への道のり、そして参入は、V/Oにおいて、テレンスとの関係、そして婚約という筋書きからも、セクシュアリティへの目覚めをほのめかす。怪物のイメージが、文明的なものとの対極にあるとすれば、レイチェルはこの旅において、空間的にも、そして精神的にも、物語中において文明世界として位置づけられる中流社会と非文明的世界を行き来する。すなわち、レイチェルの船旅は、非ヨーロッパ的世界への旅、あるいは未知の文明への旅であると同時に、レイチェルの精神的発展段階においては、未知のセクシュアリティとの遭遇と重なり合う。

V/Oと同じ1915年に出版されたフロイトの“The Unconscious”は、夢などの精神の内側のイメージについて述べている。無意識とは、健康な人々における意識の中のギャップ、言い違いなどの失錯行為、夢、また精神的症状や、病人の強迫観念をさす。特に夢はもともと、ヨーロッパでは悪魔的なもの、価値あるもの、あるいは、真実性のあるものとして位置づけられ、夢の重要性はそれを解釈することによって確立された、とフロイトは述べる (141-45)。さらに“The Unconscious”の中で、無意識は空間的に説明されている。特に彼が“unconscious,” “preconscious,”そして“conscious”を“psychical topography”という、空間性を想起させる用語によって定義しようとしたとき、人間の内面性に

場所性を与えたといえる。この“psychical topography”（149）は、さらに、“the dimension of depth in the mind”（149）のように、層をなす空間として言い換えられてもいる。

無意識はまた、“Civilization and Its Discontents”（1930）において、文明という文脈の中で言及されている。フロイトは無意識と文明との関係を特に“id”の中に位置づける。フロイトは文明を無意識の精神としての“id”を統制する権威として定義している。この権威は“super-ego”の確立を通して内面化される。文明とは、動物という祖先から、あるいはその時の記憶と彼が定義するものから人間を区別するような功績や規則全体のことを示すとフロイトは述べる（278）。フロイトによる自己の定義はヨーロッパ中心的な、あるいは帝国主義的な地理学的構造を反映しているともいえる。すなわち、自己は文明の主体と文明化されるべき客体を合わせ持つということである。無意識の定義は、夢と覚醒や、精神的異常と正常との間の区別だけでなく、「文明に抑圧された領域」と「文明の空間」、帝国主義のメタファーを用いれば「未開地あるいは植民地」と「ヨーロッパ」とを対立させて提示する。それは人間の内面だけでなく、外側の現実の帝国主義的地理観とも関連する³。

ラプランシュとポンタリス（J. Laplanche and J.-B. Pontalis）は、フロイトによる精神のイメージである“topography”について、“a psychical space which is susceptible of figurative representation”（449）のように、空間的なイメージを伴う比喩的表象であると説明し、さらに、“topography”の“theory of ‘places’”（449）としての定義を説明する。フロイトによる層をなす精神空間のイメージは、後期のフロイトの著作“New Introductory Lectures on Psychoanalysis”（1932）における、構造的モデルにもみられる。フロイトによれば、“super ego”は“ego”が“id”を支配しそこなうのを常に非難する役割を担うものであり、“ego”および“super ego”には、“the possibility of portions of the ego and super-ego being unconscious without possessing the same [the id’s] primitive and irrational characteristics”（107）があるとする。“id”は、原始性、非論理性を伴った無意識を含むが、“ego,” “super-ego”は“id”の持つそうした原始性とは切り離された無意識を保持する。すなわち、フロイトは“ego,” “super-ego,” “id”の構造的モデルのどの段階にも無

意識的なものがあるとする。フロイトは、各精神的構造にもまた、無意識という、いわば地理観を伴った空間を想定していると考えられる。

同じ構造がサイード (Edward W. Said) の *Orientalism* の中で論じられた “imaginative geography” にも見られる。サイードが述べるように、ヨーロッパ中心な地理学的構造とは、全く恣意的な区別がなされている対立する2つの空間から成り立っている。すなわち、文明化された、身近にあって親しみ深い空間としての我々の世界と、他者に属する空間としての文明化以前の空間である (54)。未知の精神的領域である無意識もまた、他者に属する文明化以前の精神的空間である。無意識的世界の地理性についてはフロイトとV.O.はおよそ一致し、無意識的なものの場所性の一貫性がみられる。すなわち、無意識は未知なる土地、未知なる大陸、また未知のセクシュアリティを想起させる。フロイトでは、殊に未知なる過去や記憶の存在する場所を連想させる。

フロイトはまた、“Civilization and Its Discontents” (1930) の中で女性と文明との関係について述べる。それによれば、女性は文明の対極にあり、家庭や性的生活への興味を体現するもので、文明の担い手は男性となっているとのことである (293)。ここでフロイトは家父長制における男女の役割分担を表現している。「文明」とは男性の特性ということになり、文明・非文明の関係から言えばそれは男性を帝国主義とも結び付けるものである。フロイトにおいては、精神の中の未知なる部分、すなわち無意識が地理的世界の中の「未知」なる場所という場所性を与えられているばかりか、女性性と結び付けられているのだ。

ここで、レイチェルをフロイトの文明論における女性観と対照させてみたい。レイチェルは父親のウィロウビーによって、彼の役に立つよう教育される。父は彼女を他の階級や友達から隔離し、彼女の自然な成長を阻害した。ウィロウビーはレイチェルを、ヘレンに紹介するにあたり以下のように告げる。

“... She’s a nice quiet girl, devoted to her music – a little less of *that* would do no harm. ... we lead a very quiet life at Richmond. I should like her to begin to see more people. I want to take her about with me when I get home. ... I should want Rachel to be able to take more part in things. A certain amount of

entertaining would be necessary—dinners, an occasional evening party. One's constituents like to be fed, I believe. In all these ways Rachel could be of great help to me.” (85-86)

彼女は世界の現実の情報や本当の友達もなくそれまでの人生をほとんど一人で過ごした。さらに父親の教育が、言い替えれば、家父長制社会がレイチェルを子供の段階に閉じこめていると言える。ウィロウビイは家父長制社会の担い手であると同時に、海を支配する大英帝国の船長として、帝国に直接的に貢献する点では、彼は帝国主義的権力と父権的権力を合わせ持つと言える。そして自らが文明を所有していることを理由に、文明を所有していないものを支配するという行為を正当化する事になる。この男性による支配あるいは帝国主義による支配の中では、文明を持たないもの、また女性—世間知らずの自分の子供—を支配することもまた正当化される。レイチェルの指導役となるヘレンは、ウィロウビイに従いレイチェルが“Tory hostess”になるための“a complete course of instruction in the feminine graces” (86) をほどこす約束をする。船上、またサンタ・マリーナのホテルの世界は旅先の外国ではあるが、それが可能となるロンドンの社交的世界の延長線上にある。

レイチェルは、それまで、セクシュアリティから隔離されてきた。しかし、女性のセクシュアリティというものの自体、謎の部分であるとして、フロイト以前は明らかにされてこなかった。“The Question of Lay Analysis” (1924) においてフロイトは、女性のセクシュアリティが心理学にとっては“dark continent”であるとする(313)。ここでも、帝国主義のメタファーに従えば女性のセクシュアリティは、明らかにされるべき暗黒大陸という場所だということになり、文明化あるいは支配されるべき植民地的領域であることの比喩が読み取れる。

しかしこの小説はそうした謎の女性のセクシュアリティにある意味付けをしている。その一つが前述のレイチェルの夢である。それは動物的なイメージや恐怖の対象として示される。サンタ・マリーナのホテルで出会い、後にフィアンセとなるテレンスはピクニックを主催するのであるが、ピクニック中、サンタ・マリーナの郊外の未開地のシーンにおいても、男女のセクシュアリティが

レイチェルの目の前であからさまになる。レイチェルとテレンスは、“When Arther again turned to her [Susan], butting her as a lamb butts a ewe, Hewet and Rachel retreated without a word. Hewet felt uncomfortably shy. “I don’t like that,” said Rachel after a moment.” (140) という描写のように、婚約を果たしたばかりのアーサーとスーザンが、地面に横たわっているのを見かける。未開地において登場人物たちは文明のしがらみから解放される。ここでもまた、セクシュアリティには動物的なイメージがつけ加えられている。このようにピクニックは文明と野蛮性を伴った空間である。すなわちピクニックは、小説の中でパーティ、お茶会、また晩餐会の形をとって繰り返され、上層中流階級社会の慣習という文明性を示すとともに、アーサーの行為を動物に例えた表現にも見られるとおり、多分に非文明性を伴ったものとして描写される。しかしレイチェルはセクシュアリティに嫌悪を感じ、それを心理的に拒否しているといえる。彼女のセクシュアリティに対する明らかな態度には、父権社会や帝国主義による支配下にあるべき場所としてのセクシュアリティの位置付けを逸脱する側面がある。

さらに踏み込んだ南アメリカ現地の体験として、フラッシング夫妻によって催される川の上流を散策する船旅がある。この小旅行は、文明から離れることを目的とした旅行であることが、フラッシング氏の、“We’re no distance from civilization yet.” (268) と、さらに奥地を目指す意気込みを示したセリフからわかる。“I [Mrs. Flushing] want to go up there and see things for myself. It’s silly stayin’ here with a pack of old maids as though we were at the seaside in England. I want to go up the river and see the natives in their camps.” (235) というフラッシング夫人の発話にも、イギリス人社会から遠ざかり、さらに現地の人々を「見る」という帝国主義的視線を伴う気晴らしへの願望がみられる。未開の空間はイギリス人ツーリストとして訪れた彼らには新鮮な印象を与えるかにみえる。イギリス人らの経験は、あらかじめツアーのために仕立て上げられ、再び繰り返されるために備えられた出来事である“pseudo-event”(Boorstin 11)のように、本物らしさを持たない。またこの小説における現地の人々との遭遇は、ツーリストのために用意された、あらかじめ予期されている想像上の快樂の追求(Urry

13) を意味すると考えられる。

しかし、奥地までたどり着いたある日、現地の人々と出くわす。そこで、彼らは観光客として見る側ではなく、現地の人々によって見られる側となる。

The women took no notice of the strangers, except that their hands paused for a moment and their long narrow eyes slid round and fixed upon them [the tourists] with the motionless inexpressive gaze of those removed from each other far, far beyond the plunge of speech. Their hands moved again, but the stare continued. (284)

首長らしき人物と交渉し、彼らのあばら家を覗く際にも、“... in the dusk the solemn eyes of babies regarded them, and old women stared out too.” (284) と描かれるように、現地の人々の視線に出くわす。イギリス人一行がかえって現地の人々の見せ物となっているに等しい点において、イギリス人らは見る側、すなわち優位に立つ帝国主義者ではなくなる。

現地の人々から凝視されることにより、帝国主義的上下関係の立場の揺らぎが生じる中で、テレンスとレイチェルは会話を交わす。

“Well,” Terence sighed at length, “it makes us seem insignificant, doesn’t it?”

Rachel agreed. So it would go on for ever and ever, she said, those women sitting under the trees, the trees and the river. . . . They had not gone far before they began to assure each other once more that they were in love, were happy, were content; but why was it so painful being in love, why was there so much pain in happiness? (285)

二人は幸福の最中に苦悩に苛まれていることに気づく。文化の違う他者から向けられた眼差しが重要であるのは、イギリス社会が期待する視線による自己規定を強いられないということである。現地で婚約に至りそれを祝うパーティも

開催された、アーサーとスーザンという恋人同士とは対比的に、レイチェルとテレンスにとっての文明から離れた奥地での経験は、セクシュアリティとは無縁であるばかりか日常の行為の反復と連続性を想起させるものであり、現地の人々の視線によって、自分が「取るに足らない存在」であることを悟る起因となっているのみである。そのため、二人にとってこの経験はツーリスト的娛樂ではない。

この小旅行では、イギリス人一行が文明を離れた奥地をいかに経験したか、何を観察したのかといった旅行体験は大して描写されない。レイチェルとテレンスも、未知の世界をツーリストとして経験する点はほとんど強調されていないのだ。川の上流の未開の土地において、二人は訪れた中でも最も奥地の林の中に到達する。そこでテレンスは自分の内面をさらけ出すが、彼が発したありきたりのフレーズをレイチェルが「繰り返す」という点に、彼らが交わす言葉の特徴がある。

“You like being with me?” Terence asked.

“Yes, with you,” she replied.

... “We are very happy together.” He did not seem to be speaking, or she to be hearing.

“Very happy,” she answered.

They continued to walk for some time in silence. Their steps unconsciously quickened.

“We love each other,” Terence said.

“We love each other,” she repeated.

The silence was then broken by their voices which joined in tones of strange unfamiliar sound which formed no words. (271)

テレンスの発話はほとんど独白である。レイチェルはテレンスの言葉を繰り返すが、彼女の言葉は、テレンスと対話をするという意図もなく彼女自身の内で

反復されているように聞こえる。さらに、彼らの言葉は、慣用的な言い回しである常套句を独白しているようでもある。こうして、ありきたりの型を繰り返すことによって、慣習の中に閉ざされていく様子にも見える。ボウルバイ (Rachel Bowlby) は、この二人の恋愛について、ウルフのどの小説よりも、“being ‘in love’”の状態が、恋愛だとは識別できないような奇妙で苦痛に満ちた状態として描かれるが、言葉はそれを描こうとしても表現し損ねている、と評する(175)。

テレンスは約束した時間を過ぎて林の中にいるのに気づき、二人はまるで夢遊病者のように歩き続ける。

“We’re so late – so late – so horribly late,” he [Terence] repeated as if he were talking in his sleep. . . . They walked on in silence as people walking in their sleep.”
(272)

そして、林の中で、自分達がつい今しがた何をしていたのかを思い起こす。

“We sat upon the ground,” he [Terence] recollected.

“We sat upon the ground,” she [Rachel] confirmed him. (282)

彼らは現実の中でコミュニケーションするのではなく、その反復的な発話はかえって二人をそれぞれの個人的な内面世界にこもらせる。レイチェルとテレンスとの間の、感情的すれ違いの多い、共感に欠けた人間関係は、二人が夢遊病者のように歩いていると表現されている通り、夢といった非現実的な世界か、あるいは制度的にかなった恋人関係から逸脱した世界を体現している。

もっともレイチェルは、物語の最初から船上、そして現地における人間同士のコミュニケーションとは一線を画し、自己の世界にこもる人物として描かれている。彼女は読書中にどこかへ行ってしまった自分の意識を取り戻そうとする。

... she began to raise her first finger and to let it fall on the arm of her chair so as to bring back to herself some consciousness of her own existence. She was next overcome by the unspeakable queerness of the fact that she should be sitting in an arm-chair, in the morning, in the middle of the world. ... Her dissolution became so complete that she could not raise her finger any more, and sat perfectly still, listening and looking always at the same spot. (125)

ここで、彼女は外的世界から孤立しているだけでなく、彼女の身体感覚からも疎外されている。物語の終わりにおける彼女の死は、こうした彼女の徐々に統合性が崩れ落ちる精神と身体の延長上にある。

さらに、“She seemed to be able to cut herself adrift from him, and to pass away to unknown places where she had no need of him.” (302) とあるように、テレンスは、レイチェルとの会話中に彼女の存在が希薄になってくることを指摘し、レイチェルが人との関わりを必要とせず、「海」、「空」といった空間のみを求めている様子であることが、テレンスの視点から描写される。

It seemed to her now that what he was saying was perfectly true, and that she wanted many more things than the love of one human being – the sea, the sky. She turned again and looked at the distant blue, which was so smooth and serene where the sky met the sea; she could not possibly want only one human being. (302)

「海」、「空」は開かれた空間であり、眼前のテレンスのみならずそれまでの因果関係から切り離された、ニュートラルな空間である。フロイトの無意識が、人間の太古の記憶あるいは動物の祖先と関連する過去であるとして、現実の事象との因果関係の中で解釈されるのに対し、殊に後に述べる病床のレイチェルの内面性には、現在と過去との因果関係を連想させるイメージはなく、さらに非文明的あるいは野蛮なイメージの想起はあるとしても、彼女の内面の表象はフロイトにあるような帝国主義的地理観に基づく優劣概念を想起させるものではない。

熱病により外界とのコミュニケーションを絶つ彼女は、彼女自身にしか見えないものを目にし、発話もその対象を持たない。

“You see, there they go, rolling off the edge of the hill,” she said suddenly.

“Rolling, Rachel? What do you see rolling? There’s nothing rolling.”

“The old woman with the knife,” she replied, not speaking to Terence in particular, and looking past him. (333)

こうしたパッセージは彼女の夢か非現実的な意識の世界を説明する。さらに、“She looked as though she were entirely concentrated upon the effort of keeping alive. Her lips were drawn, and her cheeks were sunken. . . . But she only saw an old woman slicing a man’s head off with a knife.” (339) にも見られるとおり、レイチェルによる発話はないが、彼女の視点の対象を語り手は描写する。レイチェルの言葉は、コミュニケーション不可能なものであるが、重要であるのは、小説の始めからレイチェルは彼女自身の隔離された世界を持ち、突然の筋書きを逸した言葉は彼女に特有の性質となっている。テレンスが“You’re like a bird half asleep in its nest, Rachel. You’re asleep. You’re talking in your sleep.”(289)と云うが、レイチェルの内的世界を定義すること、あるいは彼女の夢を解釈することは難しい。フロイトも『O』も「現実」の裏側の世界を表出させているが、レイチェルの場合は非論理的、定義不可能な空間として提示される。

レイチェルの内面的世界の提示は、ウルフの小説技法の発展上、後に語り手の視点の対象として重要性を持つてくる登場人物の内面性として発展してゆくものと考えられる。ロレンス (Patricia Laurence) の言葉を借りれば、レイチェルの内面は静寂のレトリックによって、精神分析学によっては定義され得ない女性の内面性を物語っているとも言える。この内面性を表出させることは、伝統的な言説によっては表現することのできない女性の内的世界を、語りの新しい対象とすることであると言える (139, 168)。本論で分析したレイチェルの内面世界は、彼女の夢をとってみれば、フロイト的な無意識世界にみられる野蛮性やセクシュアリティにまつわる領域に類似する表現もあるが、物語の終わ

りでは、彼女の内的空間の象徴的意味づけ自体が否定されている⁴。

フロイトは文明論の中で、社会の制度はある種の反復強制によって保たれていると述べるが、レイチェルの沈黙、すなわち病床においてコミュニケーションを絶ち死へと至る沈黙とは、その反復強制を打ち破るものであるという点において、雄弁な沈黙である。なぜなら、彼女の内的世界の表現は男性支配の社会の論理を逸脱した女性の内面性の表出だからである。彼女を死に至らしめる沈黙へと陥れた理由はいかようにも解釈できよう。しかしその沈黙そして死自体に意味があるのだ。それは何かを雄弁に暗示し得る沈黙であり、家長長制社会の押しつける自己規定を逃れるため、すなわち、過去との断絶をはかるための沈黙である。

フロイトが無意識の表出を現実世界との因果関係によって説明し、現在の状況の原因を過去に求めるのに対し、V Oでは、語りは表出された内的世界の経緯や意味を説明しない。殊に病床のレイチェルの衰弱しつつ消えて行く意識は、因果関係を逃れ、その必要性を主張しているともいえる。ウルフはレイチェルという登場人物を媒介に、非論理的な人間の意識自体を表出しようと試みたものであり、それに対する何らかの解釈は、病床において熱に侵された精神といった表層的理由以外には、作品中には与えられていない。内面世界の言語は、フロイトの理論では意識の裏側にあって過去や初期段階の人間の心理や狂気とも結び付けられるものだが、V Oの語り手はその因果関係や過去性を努めて逃れようとし、現実の人間の心理の一つの層としての存在理由を与えたということが出来る。この小説は20世紀初頭においては、それまで明らかにされてこなかった、女性のセクシュアリティにフロイトとは別の意味付けを与えた点において重要である。V Oにおける女性の内面を表現する無意識的言語には、フロイトにおける非文明的、または植民地的な内的トポグラフィーが必ずしも与えられているわけではない。セクシュアリティ自体が、ヴィクトリア朝社会の制度の中では帝国主義をも支える結婚の枠組みへの参入を意味するが、それを拒んでいるのが本小説の女主人公である。それは男性中心的、制度的な女性観を廃し、そうした価値観に基づいた因果関係や物語の結末をあえて避けようとする意図の現れであり、こうした内面性が後のウルフの小説では語りの中でよ

り前景化されてくるのであろう。

注

¹ Louise DeSalvo は, “Rachel was left to her own devices as a child. She was provided with no real care, no real comfort, no real information about the world, no real companionship” (166-67) と指摘する。

² エスティはさらにV/Oにおける帝国主義的ロマンスの崩壊について述べる。植民地空間における若い主人公の成人への成長の失敗は、帝国としての主体性を危うくすることに繋がり、結果的にV/Oは帝国主義的および父権主義的な刻印を押されることを拒否しているのだ(141)と論じる。

³ フロイトによる“Female Sexuality”(1931)に見られる女性の能動的なセクシュアリティの表現は、本論の文脈には当てはまらないため割愛するが、文明論の観点から指摘すべき点がある。“Female Sexuality”は女兒が成長段階において母親から離反する原因の一つとして、母乳を与えられる期間が短すぎたために生じる母親への非難を取り上げ、“It would seem rather that this accusation gives expression to the general dissatisfaction of children, who, in our monogamous civilization, are weaned from the breast after six or nine months, whereas the primitive mother devotes herself exclusively to her child for two or three years. It is as though our children had remained for ever unsated, as though they had never sucked long enough at their mother’s breast.”(381)のように、文明による抑圧によって生まれる不満について言及する。ここでは「未開人」と文明人が対比され、文化が無いものとして理想化された「未開人」の行為が快楽の追究と関連付けられており、セクシュアリティの植民地主義的地理性を物語るといえる。

⁴ ラカン (Jaques Lacan) は、想像的な身体 of 統合性が認識され、制度的な象徴体系が植えつけられる段階に至った「鏡像段階」について、“This moment in which the mirror-stage comes to an end inaugurates. . . the dialectic that will henceforth link the *I* to socially elaborated situations.” (5) と説明付ける。レイチェルの心の奥底は、社会性というもの、言い換えればすでに確立されている秩序や制度によっては支配されていないという点において、鏡像段階が成り立たない。

引用文献

- Abel, Elizabeth. *Virginia Woolf and the Fiction of Psychoanalysis*. U of Chicago P, 1989.
- , Marianne Hirsch, and Elizabeth Langland. *The Voyage In: Fictions of Development*. UP of New England, 1983.
- Boorstin, Daniel J. *The Image: A Guide to Pseudo-Events in America*. 1961, Atheneum, 1987.
- Bowlby, Rachel. “Virginia Woolf’s ‘In Love.’” *Feminist Destinations and Further Essays on Virginia Woolf*. Edinburgh UP, 1997, pp. 173-90.
- DeSalvo, Louise. *Virginia Woolf: The Impact of Childhood Sexual Abuse on Her Life and Work*. Beacon P, 1989.
- Esty, Jed. *Unseasonable Youth: Modernism, Colonialism, and the Fiction of Development*. Oxford UP, 2012.
- 遠藤不比人『死の欲動とモダニズム－イギリス戦間期の文学と精神分析』慶応義塾大学出版会, 2012.
- Freud, Sigmund. *Civilization, Society and Religion: Group Psychology, Civilization and Its Discontents and Other Works*. Edited by Albert Dickson, translated by James Strachey, 1930, Penguin, 1985.
- , “The Dissection of the Psychical Personality.” *New Introductory Lectures on Psychoanalysis*, edited and translated by James Strachey, 1932, Penguin, 1991, pp. 88-112.
- , “Female Sexuality.” *On Sexuality: Three Essays on the Theory of Sexuality and Other Works*, edited by Angela Richards, translated by James Strachey, 1931, Penguin, pp. 367-92.
- , “The Question of Lay Analysis: Conversations with an Impartial Person,” *Historical and Expository Works on Psychoanalysis*, edited by Albert Dickson, translated by James Strachey, 1924, Penguin, 1986, pp. 283-353.
- , “The Unconscious.” *The Essentials of Psychoanalysis*, edited by Anna Freud, translated by James Strachey, 1915, Penguin, 1986, pp. 142-83.
- Lacan, James. *Écrits: A Selection*. Translated by Alan Sheridan. 1977.
- Laplanche, Jean and Jean-Bertrand Pontalis. *The Language of Psycho-analysis*. Translated by Donald Nicholson-Smith. Norton, 1973.
- Laurence, Patricia O. *The Reading of Silence: Virginia Woolf in the English Tradition*. Stanford UP, 1991.
- Lewis, Roy and Angus Maude. *The English Middle Classes*. 1949. Phoenix House, 1980.

Robbins, Dorothy Dodge. "Virginia Woolf and Sigmund Freud: Diverge on What a Woman Wants." *The Centennial Review*, vol. 39, no. 1, winter 1995, pp. 129–45. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/23739558>.

Said, Edward W. *Orientalism*. Penguin, 1978.

Urry, John. *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*. Sage, 1990.

Woolf, Virginia. *The Voyage Out*. Harcourt, 1920.

Synopsis

Uninterpretable Silence: The Location of Civilisation and Feminine Consciousness in The Voyage Out

Yuko Ito

Virginia Woolf's first novel, *The Voyage Out* [VO] (1915) portrays binary oppositional worlds. Those are depicted as an exoticised world and the civilised world, which are reflected in the world of the 'unconscious' or madness and that of the 'conscious' or rationality, while presenting the rite of passage of the protagonist, Rachel Vinrace. This paper thematically discuss the dissolution of Rachel's psychical world in the context of psychical and social structures that encompass the aforementioned binary oppositions.

The argument in this paper refers to the Freudian developmental model—the inter-relation of the development of the individual and that of the civilised society. According to Freud, the prehistoric memories of the Freudian unconscious, like an uncivilized culture, are hidden but discovered in the process of the transition to maturity as something that dominates the present status of the civilised mind. This discovery is attached to that of the new world—the territories colonised by Europe. The analysis in this paper focuses on the analogous structure in both VO and Freudian theories regarding the unconscious and civilisation provided that the same problem of modernistic thought prevails in both: that is, the implication or the presupposition of psychical depth as a world under the conscious, the sane, or the civilised world.

The Freudian self is the representation or the reflection of the European-centred geographical structure, which contains the subject of civilisation and the object to be civilised. The same structure can be found in the imaginative geography of Orientalism. The distinction between civilisation and barbarism, though imaginative and arbitrary, functions as the device of domination in empire politics. The unconscious as a culturally

repressed site is compared to the sexuality that Rachel comes across, where the image of sexuality for Rachel is something that she hates and refuses to perceive.

The story links Rachel's voyage and her stay in a foreign country, a colonial space for the English, with the possibility of the awakening of her sexuality. Rachel's psychological innermost space, however, is neither the territory of barbarism nor that of sexuality. It refuses to enter the symbolic stage; thus the impossibility of interpretation remains. Rachel's death at the end of the novel is an extension of her isolation, which begins in the first half of the novel. This inwardness, being different from the site of the Freudian human ancient memory of the unconscious, is presented as Rachel's disposition, as something neutral that refuses interpretation. In this sense, this novel denies the Freudian metaphor of the unconscious and civilisation.

Rachel's silence is a breaking up of a woman's imagination, which is never judged by the repetition compulsion of the laws or regulations of the male-dominant society. Simultaneously, in this first novel, Woolf begins to explore the verbalisation of silence or inwardness, which had been repressed in the patriarchal society. The language of internality, which might as well be interpreted as the language of madness in Freud's theory, has its own 'raison d'être' as an expression of a layer of the human psyche in reality. *VO*'s significance lies in its description of female sexuality, which had not been interpreted fully in Freud's theory.